

刷毛に水を少し付て、軽くつかふこと、ていねいに幾たびも刷べし、如此すれば、白粉よくのびて、光澤を出すもの也、兎角眉作のつかひやう數すくなければ、白粉うきてよろしからず、

〔譚話浮世風呂 三編下〕おいへそしておめへ、夫ばかりぢやアねへはな、顔の白粉と生際の白粉と、襟の白粉とは、別々に有ての眉掃も三本入るとき、おかべヲヤ大騒らしい、私らは眉掃さへ遣ね

へものをや、

〔姫入記〕よめ入の條々

一。お。し。ろ。い。の。は。こ。是。も。て。ば。こ。の。ご。と。く。な。り。お。し。ろ。い。を。入。て。つ。ね。に。と。り。出。し。を。く。な。り。

〔婚禮道具諸器形寸法書 地〕白粉筥 太サ徑二寸一分、高一寸七分、蓋高七分五リン、甲、肉二分半、身覆輪トモニ九分半、略下

〔落窪物語 四〕北のかたいとよくゑたる扇二十、螺すりたる櫛、まき繪の箱に白粉入て、こゝの人の

かたらひけるして、かたみにみたまへとてとらす、

〔榮花物語 初花〕御前に扇おほく候中に、蓬萊つくりたるを、はこのふたにひろげて、日かげをめぐりて、まろめおきて、そのなかにらてんゑたるくしどもを、入て、まろひ物などさべいさまにいれ

なして、おほやけさまにかほまらぬ人して、中納言の君の御つぼねより、右京の君のおまへにと

いはせて、さしをかせつれば、略下

〔榮花物語 十一花〕かくて中宮藤原好子も、たゞにおはしまさねば、出させ給て、略中つち御門殿に

はわたらせ給に、宮の御をくり物になにわざをしてまいらせんとおぼしけるに、略中女房のな

かには、おほいなるひわりごをして、まろい物たき物などを、入て出し給へりける、

〔明月記〕寛喜二年正月十五日戊寅、後聞行幸被儲置物、略中蒔繪御草子箱、入白物具、蒔繪御硯筥置

之、